

D. H. ロレンスの『息子と恋人』再考

—— フェミニズム批評による一考察 ——

竹 岡 千 代

Rethinking *Sons and Lovers*: A Feminist Approach

TAKEOKA Chiyo

The dualisms at the root of Enlightenment thought are product of the dualism between male and female. In each of the dualisms such as rational/irrational, the male is associated with the first element, the female with the second. In each case the male element is privileged over the female. Patriarchy in the modern period is a reflection of the male privilege and an important aspect of *Sons and Lovers*.

The purpose of this paper is to demonstrate how the three women protest against the male superiority in patriarchy and can't get over their inferiority. Mrs. Morel is a sacrifice for patriarchy as motherhood supporting the British Empire. Her motherhood makes the female inferiority definitive. Miriam denies her physical being of herself for irrational to gain a rational mind. But she has to sacrifice her physical being for her love to Paul and recognize herself as inferiority. Clara is an individual free from patriarchy and also a threat to the patriarchal system by her sexual license. But Paul demands her to be motherhood in patriarchy, which denies her way of life and shows her inferiority.

I

『息子と恋人』(*Sons and Lovers*)はFrank Kermodeも明言しているように、Paul Morelを中心に描かれた「ビルドゥングスロマン」として一般に論じられている。¹⁾さらに、「ロレンス自身の経験に密接に関係している」ため、ポール・モレルはロレンスと同一視され、自伝的小説という観点から解釈されることが多い。²⁾従って、ロレンスであるポールに比重がおかれ、ポールと係わりをもつ3人の女性——母親のGertrude, Miriam Leivers, Clara Dawes——はポールにとってどのような影響を及ぼしたかという位置付けでしかない。言い換えれば、このテキストはポールがあくまで主体であり、3人の女性は客体と考えられるため、近代の啓蒙主

義認識論の根幹にある二項対置、つまり、その主体の優位性と客体の劣位性という枠組みをあてはめることができる。

近年、ポストモダン思想による近代の主体批判と同じく、フェミニズムは主体＝男性という規定によって、女性为主体の領域から排除され、常に二項対置の劣位性を負っていると指摘し、主体性そのものに疑問を投げかけている。³⁾ 第1次、2次フェミニズム運動も男性主体の典型的なモデルとして、近代社会の成立に重要な役割を果たした家父長制を攻撃の対象としてきたが、『息子と恋人』は家父長制を軸にした男性優位の思想を描いた作品として、フェミニストから激しく批判された。⁴⁾

本論では『息子と恋人』における男性優位思想が男根主義によるものと指摘したフェミニスト、Kate Millettの論を踏まえて、家父長制のなかで、あるいはその周縁で、客体である女性たちがいかにポールと係わり、限界を知りつつ自らの主体的な位置を見つけていったか、あるいは見つけられなかったかを解釈していくつもりである。女性の地位向上に向けた協同組合の取り組みに参加したり、上昇志向をもち続けたモレル夫人、知的向上心をもち、経済的自立を果たそうとするミリアム、婦人参政権運動に参加し、進歩的な考えをもつクレアラの3人が結局は客体であり、劣位でなければならなかった理由について考えてみたいと思う。まず、解釈の手がかりとして、次の3つの疑問点を提示する。

- 1) モレル夫人が無教養、金銭感覚のなさ、飲酒、暴力などによって、夫Walter Morelに愛想を尽かし、愛情も消えうせていたにもかかわらず、なぜ離婚することもなく、4人の子供をもうけたのか
- 2) ①知的向上心があり、ポールにとっても従順なミリアムをモレル夫人がなぜそれほど嫌ったのか
②ミリアムとポールはなぜうまくいかなかったのか
- 3) ①クレアラ・ドウズが自立し、自分の考えをもった“New Woman”として描かれているにもかかわらず、なぜ別れていた夫Baxterとやり直すことになったのか
②クレアラとポールはなぜうまくいかなかったのか

以上の疑問を順に解明しながら、論を進めていきたい。

II

モレル夫人は結婚当初から夫の借金、うそ、あるいは夫人の持ち出す話が夫が理解してくれないことによって、夫に幻滅を感じている。とりわけ、厳格なピューリタンである夫人には夫の飲酒ががまんできず、禁酒の約束をさせるが、夫はうそやごまかしをしては飲酒を続けるため、2人の争いはますますひどくなっていく。そして、ついにモレル夫人が夫を見捨てる事件が起こる。夫が1歳のWilliamの巻き毛を羊の頭のように刈ってしまったことによって、「夫人の心の中になにか重大なことが起こった」と次の引用に見られる。

“Oh—my boy!—” she faltered. Her lip trembled, her face broke, and, snatching up the child, she buried her face in his shoulder and cried painfully. . . . It was like ripping something out of her, her sobbing. . . . But she knew, and Morel knew, that that act had caused something momentous to take place in her soul. . . .

Now she ceased to fret for his love: he was an outsider to her. This made life much more bearable.⁵⁾

この事件については、モレル夫人もあとになって「男の子の髪は遅かれ早かれ切らなければならなかったのだから」(24) と言っているように、泣くほどのことではないはずである。だから、モレル夫人の泣いた理由は息子のきれいな巻き毛が切られたことではなく、息子が母親のものであり、夫といえども勝手にはさせないという思いにあったと推測できる。この事件は夫が夫人にとって「部外者」となり、夫人は妻の立場から、息子の母親の立場に移ったことを象徴的に示している。

また、モレル夫人が酔っ払って帰って来たウォルターとひどい口論をすることが頻繁にあったが、なかでも次の引用のポールを妊娠しているにもかかわらず、家から追い出されるという場面に夫人の母としての立場がよく表れている。

“The house is filthy with you,” she cried.

“Then get out on it—it’s mine. Get out on it,” he shouted. “It’s ma as brings th’ money whoam, not thee. It’s my house, not thine. Then ger out on’t—get out on’t!”

“And I would,” she cried, suddenly shaken into tears of impotence. “Ah, wouldn’t I, wouldn’t I have gone long, long ago, but for those children. Ay, haven’t I repented not going years ago, when I’d only the one—” suddenly drying into rage. “Do you think it’s for you I stop—do you think I’d stop one minute for you—” “Go then,” he shouted, beside himself. “Go!” (33)

「子供たちのために出て行かないでいる。夫のためにいるわけではない」と夫人は夫と別れない理由をはっきり述べている。だからこそ、これほどひどいことを言われ、屈辱を味わっても、夫人は結局、家に戻るのである。しかも、そのあと夫人は次の日に仕事に出かける夫のために、朝食や炭鉋に着ていく服の準備をしている(36)。こういった行為も家庭を守る母親という立場によるものであり、生活の糧を得てくる夫を単に“bred-winner”としかみなしていないことを表している。ポールを産んで、モレル夫人の気持ちはさらに確固としたものになり、「夫を見捨てて、今や愛情と人生を子供に向けることになった。」(62) 愛情がなくなっても、夫人が夫と別れない選択をしたのは家を守る母性となったからである。

近代の母性は問い直しをされない、言説に先立つ、女の生得的所与のものとして、外部に

存在し、女の価値を引き上げたように見せたことを考えると、モレル夫人が安定した家庭と、それを産み出す母性的役割に自らの価値を見出したとしてもおかしくはない。19世紀末から20世紀初頭にかけての母性について、Pat Thaneは「よい母親がイギリス社会の安定に寄与し、安定した家庭が責任ある国民を生みだし、さらに、イギリスの国際的地位を確固たるものにした」と説明する。⁶⁾ つまり、モレル夫人は自己犠牲を払って子供を産み育て、父から息子へと続いていく家父長制の存続に加担することになっていく。家父長制社会では賞賛されてきた、このような母性が結局、女の劣位を決定的にし、フェミニストAdrienne Richが述べたように「女の潜在的な能力や女自身が家父長制において男の支配下にあることを保証しようとする付属機関にすぎない」のである。⁷⁾ また、モレル夫人の上昇志向は息子への期待に見られ、あくまで家を守る母性の役割を示している。まず、長男ウィリアムを夫の反対にもかかわらず、炭鉱にやらず、共済組合事務所に採用してもらう。ウィリアムは母親の望みどおり、中流階級の人間とつきあい、ノッティンガムの会社に移り、さらにロンドンの勤め口を得るまでに出世していく。ポールも母親の意向をうけて、ノッティンガムの医療器具会社の事務員として働くようになる。モレル夫人がロンドン、ノッティンガムという大きな産業の中心地に自分の産んだ男を送り出したことに満足していることが次のように描かれている。

He was away in London, doing well. Paul would be working in Nottingham. Now she had two sons in the world. She could think of two places, great centres of industry, and feel that she had put a man into each of them, that these men would work out what *she* wanted; they were derived from her, they were of her, and their works also would be hers. All the morning long she thought of Paul. (127)

この述懐からもわかるように、2人の息子が自分の望みを実現してくれるという期待が家父長制を支え、その家父長制が産業資本主義社会の強固な基盤となっているのである。それを裏付けるように、ウィリアムはカラによってできた傷から丹毒になって死ぬ。これはウィリアムも産業資本主義社会の歯車のひとつにしかすぎないことを示唆する。母性はさらに新たな歯車を産み出すことが予想される。だから優秀なウィリアムにかけていた期待は、一心にポールに向けられていくようになる。息子のために犠牲になる母、母の犠牲によって自らの望みを実現していく息子、息子をひとつの歯車として、使い捨てる産業資本主義社会というピラミッド型の構図がここに表れている。

母性に関しては、また、モレル夫人の夫、息子への多大な影響力や夫人が家から追い出され、月明かりのなかにたたずむ場面(33)から、すべてを育み、支配する自然と母性との同一視という見方も多くの論考に見られる。⁸⁾ しかし、このテキストは近代という視点を抜きに論じることはできない。たとえばポストモダン・フェミニストであるSusan J. Hekmanは自然とのつながりから畏れと尊敬で見られた母性は近代以降、理性、科学によって支配される

ことになった自然と同様に、父性に優位をおいた二元論によってしか価値のないものとなり、家父長制における生殖機能をもつ付属機関におとしめられることになったと近代社会における母性について、簡潔に論じている。⁹⁾ Cynthia Lewiecki-Wilson もモレル夫人の強い母性こそが家父長制をより強固なものにし、再生産し続けると述べている。¹⁰⁾

Ⅲ

次に、ミリアムに関する疑問について考察したい。リーヴァス家におけるミリアムは家父長制に従属した女の典型として描かれている。満足な教育も受けられず、農作業のできるような肉体ももたず、母性という価値さえないゆえに、「ブタ飼いの娘」(174) という境遇に甘んじている。ミリアムは学ぶことによって、この境遇から抜け出したいと思っていたので、自分を厄介者扱いする粗野な兄たちとは違う知的なポールにひかれ、教えを請うようになる。ポールがミリアムに勉強を教えたり、本を貸したりといった関係をモレル夫人は初めから快く思っていなかったが、二人が思春期を迎えるころにはポールに対してははっきりミリアムに会わないように言う。

モレル夫人は自らと同様に知的向上心と上昇志向をもつミリアムがポールにふさわしくないとなぜ思ったのか。その理由として、ミリアムが男の魂を吸い尽くしてしまう女だからという夫人の考えが見られる (196)。では、そういう女の性質が具体的にミリアムのどこに表れているのか探してみたい。

“What do you want then?”

“I want to do something. I want a chance like anybody else. Why should I, because I’m a girl, be kept at home and not allowed to be anything. What chance *have* I?”

“Chance of what?”

“Of knowing anything—of learning—of doing anything. It’s not fair, because I’m a woman.”. . . But Miriam almost fiercely wished she were a man. And yet she hated men, at the same time. (185)

ミリアムはポールに「自分が女であるから」望まない境遇にいることを訴えている。男には許される「学ぶこと」ができれば、知性を身につけ、この境遇を脱出できると考えるから男だったらいのにと強く願望している。それでも一方で、自分が男になれないから男を嫌うという矛盾を抱えている。この気持ちはミリアムの信仰心からくる世俗的な肉体を捨象した精神性への信頼によって増幅され、女としての自己、つまりジェンダーアイデンティティを欠落させていく。モレル夫人はミリアムが男を嫌いながらも女の自己を否定するという矛盾を抱えたまま、ポールに対しては男の愛を望んでいるゆえに、2人には魂の、精神的なつな

がりしかもてないことがわかっていたと思われる。家父長制の存続のために、女は生殖機能を備えた肉体である必要がある。ポールの「君はぼくを精神的にするけど、そうはなりたくない」(226)という言葉やミリアムの性に対する無関心さにいらだつ態度から、男としての肉欲が見られるのに対し、ミリアムがポールに触れても物のようにしか感じていないことからミリアム自身の肉体への軽視が表れている。だからこそ、ポールへの肉欲には「ミリアムのエデンの蛇」と表された恥辱があったが、ミリアムは精神性つまり神によって乗り越えようとする。ポールとの肉体的な結びつきを自己犠牲と捉え、「犠牲となって人々に祝福を与えた神と自らを同一視する」(208-209)のである。別の見方をすれば、ポールの母のモレル夫人が自己犠牲によって、母性に自らの肯定的価値を見出したのと同様に、ミリアムも自己犠牲によって、女の肉体に肯定的価値を見出そうとしたといえるだろう。2人の肉体関係には次の引用のように、愛情のために犠牲となるミリアムの痛々しさと、愛しているから犠牲を受け入れたポールの耐え難い痛みがあったと述べられている。

She only realised that she was doing something for him. He could hardly bear it. She lay to be sacrificed for him, because she loved him so much. And he had to sacrifice her. . . . He loved her. But he wanted, somehow, to cry. There was something he could not bear, for her sake. . . . He had always, almost wilfully, to put her out of count, and act from the brute strength of his own feelings. And he could not do it very often, and there remained afterwards always the sense of failure and of death. If he were really with her, he had to put aside himself and his desire. If he would have her, he had to put her aside. (334)

ポールはミリアムの精神性を忘れなければ、自分のオスとしての欲望を満足させることができず、ミリアムと共にいたければ自分の欲望をわきにやらなければならないという精神と肉体の相克に苦しんでいる。ポールの苦しみは近代二元論における肉体を支配する精神の優位を見せ、女の肉体を支配する男の優位を暗示している。しかも欲望を生得的な男の本能として受け入れるポールは攻撃する性であり、ミリアムは受け身の侵略される性であるからこそ、ミリアムの自己犠牲が必要となるのである。犠牲を望むポールの姿はポールが子供の頃、姉Annieの女の人形Arabellaを犠牲として燃やし、満足していた姿によってすでに描かれている(82)。ミリアムに言った「結婚しよう。君にぼくの子供を生んでもらいたいんだ」(335)という言葉とクレアラに対する「結婚したい。2人の子供がほしい」(403)という言葉とがほぼ同じということを考えても、ポールは家父長制のために自分を犠牲にしてくれる女を求めているといえる。

実際に、ポールは家父長制における男性優位の考え方を見せている。ミリアムが女だからできないことがあるのは不公平だと述べても、ポールは「でも、女であることは男と同じくらいいいことだ」(186)と言い、ミリアムの不満について全く理解していない。自らが男だから

からこそ、優位に立ち、特権をもっていることに無自覚なのである。また、ポールは勤め先で男と女とでは仕事への取り組み方が違うと思っている。「男は仕事そのもの、仕事も男そのものとして、2つのものはしばらくの間、一体となった。女の場合は違っていた。女の実体はそこで仕事をせず、まるでそこから外に出て待っているかのようなだった。」(140) という見方には女は仕事以外のことを考えて、仕事に全精力を注げないから、働くのには適していないという女性への偏見がある。ようやくミリアムが職を得、自立することになったときも、支援していたはずなのにポールは失望の色を隠せない。ポールの「自立してやってゆくことがすべてとは限らない」、「仕事は男にとってほとんどすべてになりうるが、女は自分の一部でしか仕事をしない、本質的で重要な部分は隠されている」(460) とミリアムに言ったことも、働く女に対する蔑視であり、女性を劣位においていることを示す。フェミニズムの視点から、ロレンスを含む男性作家を男根主義として批判したケイト・ミレットもこの部分に関して「男より劣った女の本質では客観的な活動はできない」といったポールの考えを表していると述べている。¹¹⁾ ミリアムはポールの考えに怒っても、母親を亡くしたポールを支えるために再び、自分を犠牲にしようとするが、ポールは受け入れない。ミリアムの悲劇はやはり、近代啓蒙思想の根底をなす二元論にある。神に依拠するミリアムには肉体に対する精神の優位は絶対的であることと、ミリアムが合理性にもとづく知を得て自立をはかろうとしている事実とがあっても、実のところ、女のおかれている立場は精神性、合理性から排除され、非合理的な肉体をもつ存在として男より劣ったものと位置付けられている。換言すれば、知の領域は男が占有しているという暗黙の了解がある。ポールとミリアムの性的な結び付きが2人を引き離すことになったのもポールの望む犠牲としての肉体、つまり劣ったものとして宿命づけられた女の性を与えることによる。母性と同様に、生得的に所与されたものとして決定づけられた性差 (sex) をミリアムは乗り越えることはできない。

性差を “the biology-is-destiny formulation” と言った Judith Butler はポストモダンの立場から、このようにセックスを問い直しのできない外部におくことがジェンダーとの二項対置を生み、性差による女性の劣位を自明のものとする二元論にからめとられるゆえに、セックスとジェンダーとの関係を新たな言説を用いて次のように述べる。

If the immutable character of sex is contested, perhaps this construct called “sex” is as culturally constructed as gender; indeed, perhaps it was always already gender, with the consequence that the distinction between sex and gender turns out to be no distinction at all. . . . This production of sex as the prediscursive ought to be understood as the effect of the apparatus of cultural construction designated by *gender*.¹²⁾

ジュディス・バトラーはセックスが生得的所与の性差であり、ジェンダーが社会的に獲得された性差という従来の対置関係を転倒させ、特に不問にされてきたセックスの問い直しをは

かっている。セックスをバトラーのいう「ジェンダーの文化的構築装置の作用」と考えれば、ポールとミリアムとの関係が言説に先んじた肉体と本能による関係という解釈は根底から覆ることになり、逃れられない家父長制の枠組みにおける再生産のひとつの装置にしかすぎないということになるのではないだろうか。しかしミリアムは女の肉体に肯定的価値を見出せないまま、家父長制社会のなかでとどまるしかない。

IV

本章ではクレアラについて考察していく。クレアラはバクスター・ドウズと結婚して5年目に別居し、母親と暮らしている。クレアラにはほかの2人の女性とは異なり、守る家庭も脱出すべき家庭もない。またクレアラはWSPU (the Women's Social Political Union) (1903-1914)の会員として、10年間、女権拡張運動に取り組む進歩的で、知的な女性である。実際に『息子と恋人』が1913年に出版された頃、WSPUがイギリスで女性の参政権獲得のために運動しており、その活動家のなかにクレアラのモデルとなったロレンスの友人 Alice Dax がいたことなどは Hilary Simpson が詳細に論じている。¹³⁾ また、クレアラの前向きで、開放的な考え方は「自由で自立していられる限りは満足している。なくして残念に思うことはすべて後ろにおいてきた」(273-274)とリーヴァス夫人に述べた言葉に見られる。こういった点を踏まえると、クレアラは19世紀末に現れた、社会的な規範に縛られない“New Woman”の特徴を受け継いでいると捉えてもいいだろう。“New Woman”は母性の否定、高等教育を受けたこと、そして性的放縦さの三つが主な特徴として挙げられるが、どれもクレアラの備えているものである。¹⁴⁾

男性優位に無自覚なポールにはクレアラの活動が理解できない。たとえば「女が自分たちのために戦うより、男が女のために戦った方がいいと思っているのね」とクレアラが言うとポールは「自分のために戦っている女は鏡の前で自分の姿に向かってほえている犬のようだ」(274)とばかにした調子で答えている。ポールにとってクレアラは性的に魅力のある女ではないことを、常にクレアラの体に向けられる視線、触れたい衝動が物語っている。2人の肉体関係はポールにとって個人としてのクレアラとではなく、人格を超えた一人の女性との関係であり、古代からの生の偉大な力を知るものであった(399)。しかし、クレアラにとって肉体関係は生の偉大な力を知ることより、個人として認め合うことに意味があったのである。ポールが相手に求めているのは生命を産み出す女の肉体、つまり母性だと受けとれる。クレアラが結婚に縛られない、個として自立した女であるのに対し、ポールが家父長制における女、母性を求めたことが2人の別れる理由であった。

さらに、クレアラの“New Woman”としての位置付けは2人の立場の違いを明確にする。“New Woman”は19世紀末から20世紀初頭のアンチ・フェミニストによって、その特徴から生殖能力の欠落、あるいはたとえ子供を生んだとしても、今までとは違う新種で、発育阻

害があり、水頭症を伴うという偏見に満ちた非科学的な説で非難されたが、¹⁵⁾ 次の引用のように、その説を根拠に帝国主義国家まで脅かす存在と考えられるようになったのである。

That such fears should have been given voice at the exact moment when Britain's interests abroad seemed to be increasingly under threat, when there was a question mark over Britain's imperial supremacy, was no coincidence. The feeling was amongst supporters of the establishment, that Britain's women urgently needed to raise up a strong British 'race' in order to sustain the nation's (supposed) supremacy, and the New Woman was construed (or constructed) as a threat to this national need.¹⁶⁾

19世紀末から、イギリスの女は帝国主義の覇権を維持するために、強い種族を生み育てなければならないという風潮が支配的になったため、“New Woman”は国家の基盤である家父長制を揺るがすと考えられた。このような観点からも、国家のために生み育てられたポールは既婚の、子供を生まないクレアラではなく、母性としての女を国家や家の存続のために選ぶしかないのである。クレアラはポールを愛していたが、ポールの望むものにはなれず、結局、落ちぶれて病気になってしまった夫バクスターの元に帰る。

別の見地から考えれば、クレアラには自活できるだけの仕事が無かったというのも家庭に帰る大きな要因だろう。Sally Ledgerは女性の仕事が19世紀末には、“low-paid factory work, sweated labour or domestic service”しかなかったが、20世紀初めによりやく、高等教育を受けた女性がデパート勤めや看護婦、教師といった仕事にも就けるようになったことで、女性の社会的地位は向上したと肯定的に述べている。¹⁷⁾しかし、賃金も含めた男女間の待遇の格差は解消されなかった。倉持氏も述べているように、知性があり、フランス語もできるクレアラであっても靴下製造工場で働くしかないのである。¹⁸⁾そのことがクレアラを参政権運動に駆り立てたわけだが、運動は思うように進まず、生活は苦しかった。バクスターが「乞食のように与えられるものは何でも受け取る」ほど弱っていた(455)ために、クレアラはポールによって個の女としての自分を否定され、自己の価値を見失った揚げ句、自己犠牲を要求されても、自己の存在価値を確認するため、そして、おそらく生活のために家庭に戻るのである。結局、近代家父長制を基盤とした結婚システムという装置に、クレアラはからめとられてしまったといえる。

V

モレル夫人は近代の帝国主義国家を支える家父長制が体現する男性優位社会の主体たる男の犠牲となり、自らが内面化した男性像を息子に実現してもらうために生きる客体でしかない。結果的にそれは家父長制の存続、帝国主義国家の覇権維持の加担を意味し、女の劣位性

をさらに強めるだけである。また、ミリアムもこの社会で自立して生きていくには男の特権である合理性、知性を得るために、非合理的な女としての自己を否定するしかない。それにもかかわらずポールとの関係によって、家父長制の枠組みのなかで、結局は主体である男の位置にはいけないことと、劣位の、侵略される性としての女を辛い気持ちで認識するのである。クレアラは男性優位社会の周縁で、“New Woman”という自立した、自由な女として生きることを選び取っていたにもかかわらず、愛するポールが女に個人ではなく、家父長制に従属する母性を望んだため、自己否定に追い込まれ、挫折する。クレアラもモレル夫人のように夫への愛情がなくても、自己犠牲を要求されても、自らの肯定的価値が見いだせる夫バクスターとの家庭に戻るという選択を余儀なくされるのである。

(本論文は、日本ロレンス協会第29回大会における発表原稿に加筆修正したものである。)

註

- 1) Frank Kermode, *Lawrence* (London: Fontana, 1973), p. 16.
- 2) Michael Black, *D. H. Lawrence: The Early Fiction* (London: Macmillan, 1986), p. 150. Bloom も自伝か小説かという点を問題にしている。
Harold Bloom, “Introduction,” *D. H. Lawrence's Sons and Lovers*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1988), pp. 1-2.
- 3) Susan J. Hekman, *Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism* (Cambridge: Polity Press, 1990), p. 5.
- 4) Pollin はこの作品では女性の登場人物がポールを主人と認める限りは自由が許されると断じている。また、Balbert はロレンスの男性優位主義に対するフェミニストの批判の歴史を反駁を加えながら描いている。
Faith Pollin, “Lawrence's Treatment of Women in *Sons and Lovers*,” *Lawrence and Women*, ed. Anne Smith (London: Vision Press, 1978), p.50.
Paul Balbert, *D. H. Lawrence and the Phallic Imagination* (London: Macmillan, 1989), p. 17.
- 5) D. H. Lawrence, *Sons and Lovers* (1981; Harmondsworth: Penguin, 1994), p. 24.
以降、この作品からの引用はすべてこの版によるものとし、文中に頁数をかっこ内に記す。
- 6) Pat Thane, ‘Late-Victorian Women,’ in T. R. Gourvish and Alan Day (eds), *Later Victorian Britain, 1867-1900* (Basingstroke: Macmillan, 1988), p. 183.
- 7) Adrienne Rich, *Of Woman Born* (New York: Norton, 1986), p. 13.
- 8) Ben-Ephraim は支配する月がモレル夫人の具現化と述べる。また、ロレンスが“Magna Mater”の性質を女性の登場人物の要素としたと Ruderman, Storch が論じている。
Gavriel Ben-Ephraim, *The Moon Dominion* (London: Associated UP, 1981), p. 92.
Judith Ruderman, *D. H. Lawrence and the Devouring Mother* (Durham, N. C.: Duke UP, 1984), pp. 11-12.
Margaret Storch, *Sons and Adversaries* (Knoxville: U of Tennessee P, 1990), p. 97.
- 9) Hekman, p. 114, p. 117.
- 10) Cynthia Lewiecki-Wilson, *Writing Against the Family: Gender in Lawrence and Joyce* (Carbondale: Southern Illinois UP, 1994), p. 88.
- 11) Kate Millett, *Sexual Politics* (1969; New York: Touchstone, 1990), p. 256.
- 12) Judith Butler, *Gender Trouble* (1990; New York: Routledge, 1999), pp. 10-11.
- 13) Hilary Simpson, *D. H. Lawrence and Feminism* (Illinois: Northern Illinois UP, 1982), pp. 19-20.
- 14) Sally Ledger, *The New Woman* (Manchester: Manchester UP, 1997), pp. 16-17.

- 15) *Ibid.*, pp. 17–18.
- 16) *Ibid.*, p. 18.
- 17) *Ibid.*, p. 19.
- 18) 倉持三郎「D. H. Lawrence と婦人参政権運動」、「東京学芸大学紀要」2 部門 31 (1980)、pp. 49–52.

(本学非常勤講師)